

市民公開講座

最新のリウマチ治療

リウマチと上手につきあうために

手指やひざなどの関節に炎症を起こす「関節リウマチ」の治療は、近年大きく進歩しています。新しい時代のリウマチ治療と、病気との上手なつきあい方について学ぶ市民公開講座「最新のリウマチ治療」が、4月21日、国立京都国際会館(京都市)で開催され、約1400人の参加者が5人の専門家の講演に耳を傾けました。



【司会】中村 孝志(独立行政法人 国立病院機構 京都医療センター) 高崎 芳成(順天堂大学医学部 膠原病内科)

リウマチについて ● 原因と診断

講演 1

新しい診断基準が変えたこと

3つの性質をもつ 全身の病気としてとらえる

関節リウマチは、全身の関節が腫れて痛み、徐々に骨が壊れて変形していく病気です。関節の痛みという意味ではリウマチ性疾患に分類されますが、様々な関節外症状をもつ膠原病や、自己免疫疾患にも分類されます。

関節リウマチは、関節の内側にある「滑膜」が炎症を起こし、それが増殖することで進行します。発症の原因はわかっていませんが、さまざまな遺伝的素因と環境的因子を基盤として、自己免疫異常が起これば、炎症性サイトカインという物質や、抗体が関節の中でたくさん産生されることで、関節の炎症(滑膜炎)につながると考えられています。

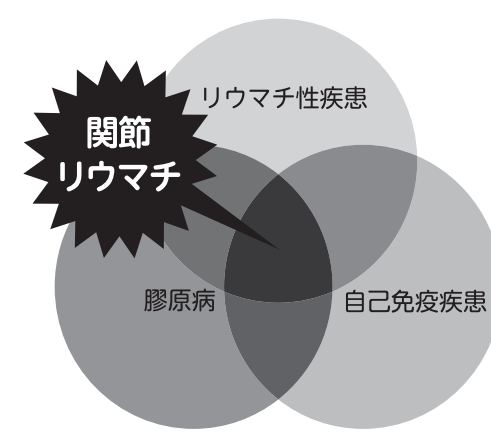
新しい診断基準により、早期の発見・治療が可能に



京都大学大学院医学研究科 内科学講座 臨床免疫学 三森 経世先生

リウマチの診断に

ついでに、長年、米国リウマチ学会の分類基準(ACR 1987)が利用されていましたが、発症してから早い時期での診断に難点があったことなどから、2010年に新しい診断基準(ACR/EULAR 2010)が発表されました。関節症状、その持続期間、血清反応、炎症反応を項目ごとにスコアリングして、点数の合計によって関節リウマチの診断を行います。これにより早期から、適切な目標を定めたリウマチ治療を行うことが可能になりました。



生物学的製剤と最新の薬物治療

講演 3

薬でできなかったことをできるものに

関節の炎症・破壊に働く物質や細胞を阻害する薬



東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 薬害監視学講座 針谷 正祥先生

関節リウマチの関節の中では、TNFやIL-6と名付けられた、炎症を起こすたんぱく質が大量につくられます。また、T細胞やB細胞といった免疫をつかさどる細胞も多数存在します。こういった物質や細胞が、リウマチの痛みや関節の破壊に重要な働きをしています。これらの働きをピンポイントで抑えるという発想で、最も新しい技術を用いてつくられたのが、生物学的製剤です。

現在、関節リウマチの治療に用いられている生物学的製剤は7種類、TNF阻害薬が5種類、IL-6の受容体を阻害する薬と、T細胞の働きを阻害する薬がそれぞれ1種類ずつあります。

有効性にすぐれ、生活の質の改善にも寄与

リウマチとうまく付き合うには？

一看護師の立場から

講演 5

ストレスや感情への対処がカギに

治療は、症状をコントロールすることだけではない

私は普段、外来で患者さんとお話をする機会が多いのですが、患者さんは、問診票には書けない「もうちょっと話したいこと」をたくさん抱えておられます。例えば「家族や職場に嘘をついて、何ともないよう振舞うことが実はとてもストレス」です。これ以上何を頑張っているのに、これ以上何を頑張っているのに、「医療者は、痛い私」をみているのではなく、私のリウマチを「みていて」といった悩みをお聞きすることがあります。こうした声からわかるのは、リウマチの治療は単に症状をコントロールするだけではないということです。患者さんは、不快な症状の管理、指示された療養の実践に加えて、周りの人間関係や自分のアイデンティティーを保つためにも、大きなパワー



甲南加古川病院看護支援センター 慢性疾患看護専門看護師 元木 絵美氏

不安や無力感からの悪循環を断ち切るために

病気をもちながら健康的に生きるということは、身体や精神に起きてくる問題を自分らしく乗り越えて生きていくということです。そのためには「やればできるんだ」という自分自身への信頼を持つことが大切です。自分の病気について理解し、自分を肯定し大切に

リウマチの関節手術のトピックス

講演 4

安全性が向上した関節手術

薬物治療で限界がある場合、関節手術も検討

十分な薬物治療をしているにもかかわらずリウマチの炎症が続く場合は、炎症を起こしている関節の滑膜を手術で切除するという選択があります。更に、関節の破壊が進んだ場合には、人工関節置換術や関節固定術などの手術が必要になります。薬物療法の進歩により、こうした手術が必要ない症例を減らすことはできています。ただ、ゼロにはなりません。ただ、手術をするからといって嘆き悲しむ必要もありません。薬を使っても、手術をしても、患者さんが活動的な生活を送ることができれば、それが健康であり幸せなことだと思います。



名古屋大学医学部 整形外科 石黒 直樹先生

大幅に向上した手術の品質と安全性

近年では関節手術における品質と安全性も大きく向上しています。例えば、人工関節の品質は大変安定していて、30年程度は持つようになっています。手術もできるだけ小さいキズで行う最小侵襲手術(MIS)が進んでおり、その標準化を支援するナビゲーションシステムなども普及しつつあります。